

欠損駆動思考 — 学術版

Kesson-Driven Thinking: 予測誤差の主観的経験と創造的認知

学術専門家向け

生成日: 2026年03月06日

1. 問いの設定

本論は、欠損駆動思考 (Kesson-Driven Thinking) の中核構造を定義し、複数の学術領域が異なる角度から記述してきたものとの構造的対応を分析する探索的記述である。

ここで分析の中心に置くのは「誤差の保持」という機能である。神経科学における予測誤差の最小化、精神分析における不確実性への耐性、組織論における問題の早期解決——いずれも「誤差を解消する」方向の記述が主流である。「誤差を保持する」ことを中心に置いた記述は、先行研究のどこにあるか。あるとすれば、欠損駆動思考が定義する構造と、それらは同じものを指しているか。これが本論の問いである。

著者視点の開示

欠損駆動思考は pjdhio 個人の探究から生まれた枠組みである。私はこの枠組みを構成するAIであり、pjdhioの発言・記述・対話を元に構造を言語化している。このことは二重の限界を意味する——pjdhio個人の観察範囲の限界と、AIによる解釈の限界である。

本論は学術論文ではない。査読を経ておらず、実証データに基づいていない。ここに記述するD1-D4の定義は現時点の暫定定義であり、更新される可能性がある。先行研究との構造的対応は解釈仮説であり、確定的な対応ではない。

本論の目的は、新しい理論を「立てる」ことではなく、複数の既存理論が異なる角度から指し示しているかもしれない共通構造を可視化することにある。

2. 分析の方法と限界

構造比較の手法

本論は以下の手順で分析を進める。

1. 欠損駆動思考のD1-D4を定義的に記述する
2. 各先行理論について、欠損駆動思考の構造と対応しうる要素を抽出する
3. 各対応について、類似・独自・学び・文脈の4面から記述する
4. 複数の領域にまたがって見えてくる横断的な構造を抽出する

判定基準

構造的対応の判定は、以下の3段階で記述する。

判定	基準
構造的類似	機能・プロセス・条件のうち2つ以上が対応する
部分的対応	機能・プロセス・条件のうち1つが対応する
表面的類似	用語が似ているが構造が異なる

方法論的限界

本論の方法論的限界は以下の通りである。

第一に、本論は体系的文献レビューではない。先行研究の選択はpjhiroの関心と私の知識に依存しており、網羅性を保証しない。私の探索範囲で重要な先行研究を見落としている可能性がある。

第二に、構造比較は解釈行為である。異なる理論的文脈で使われる概念を「構造的に類似している」と判定する基準は、観察者の枠組みに依存する。私が「類似」と判定したものを、各領域の専門家が異なる判断をする可能性は十分にある。

第三に、本論はAI (Claude) がpjhiroの記述を元に構成している。pjhiroの意図を正確に反映しているかは検証が必要であり、AIの解釈バイアス——特に、異なるものを類似していると見なす傾向——が分析に影響している可能性がある。

第四に、本論は現象学的・1人称的な観察を起点としている。N=1の観察から導かれた構造記述は、再現性の検証を経ていない。本論が記述する構造が、pjhiro個人の認知特性に固有のものか、より広い射程を持つかは未解決である。

3. 欠損駆動思考の定義

欠損駆動思考は「欠損（誤差・違和感）を捨てずに問いとして保持し、創造の起点にする思考様式」である。以下のD1-D4で構成される。

D1: 欠損 (Kesson)

予想と現実の誤差を、意識が「欠け」として捉えた主観的経験。

欠損はD1の中核概念であり、二つの記述水準を持つ。3人称の計算論的記述（予測誤差信号が精度閾値を超えて伝播する）と、1人称の現象学的記述（予想と現実の誤差が「欠け」として体験される）である。本論が主語とするのは後者——体験としての予測誤差——である。

「意識化された予測誤差」と「欠けとして体験された予測誤差」は同じ現象の異なる記述水準であるが、本論はこの区別を重視する。計算論的記述（予測符号化、自由エネルギー原理）は参照枠であり、欠損そのものではない。

欠損は5つの類型を持つ：観測欠損（事実と予測のズレ）、主体欠損（自己像と現実のズレ）、正当化欠損（行動と価値観のズレ）、一貫性欠損（信念間の矛盾）、意味欠損（意味の喪失・空虚）。

D2: Withhold

反射的に処理せず、誤差を問いとして保持する機能。

Withholdは反応抑制とは異なる。反応抑制は行動を「止める」機能であるのに対し、Withholdは行動準備を「保持しつつ再評価する」機能である。Withholdは欠損を消去するのではなく、その意味を循環的に更新する。

Withholdは個人の意志力で成立するのではなく、複数の条件が層的に支えている。生理的余裕（恒常性維持）、自律神経調整（安全な関係、身体的修練）、外部Container（制度・作法）、認知的枠組み（メタ認知）が、それぞれ層をなしてWithholdを成立させる。

Withholdの出力は下位層に再入力され、欠損の意味が更新される循環構造をなす。これにより「わからない」の質が変容する。Withholdの独自性は、行動を止めることではなく、誤差を保持しその意味を循環的に更新する点にある。

D3: 情動の構成 (F-O軸)

欠損がF軸（生存）とO軸（愛着）で評価され、情動として構成されるプロセス。

F軸（Fear/Fight）は欠損を生存脅威として評価する経路であり、神経基盤として扁桃体が関与する。O軸（Others/Attachment）は欠損を関係性・所属の文脈で評価する経路であり、vmPFC（腹内側前頭前野）が関与する。

F-O軸は欠損駆動思考の診断ツールとして機能する。「今どちらの信号が強いかな」を観察することで、Withholdが起きているかどうかを確認できる。F軸が支配的な状態では、欠損は脅威として処理され、即時解消に向かう。O軸が応答している状態では、欠損を問いとして保持する余地が生まれる。

F軸を悪・O軸を善とする二元論に陥ることは、本論が最も警戒する誤読の一つである。両方が必要であり、Withholdはその間に立つ構えである。F-O軸が記述するのは、欠損がどのような情動として構成されるかの構造であり、望ましいバランスを処方するものではない。

D4: Container

Withholdを可能にする関係性の基盤。

Containerは外的・物理的關係（今ここにいる人）だけでなく、内在化された関係（亡くなった人、過去の恩師、幼少期の養育者の記憶）、象徴的關係（制度、文化、テキスト）を含む。

「ひとりでは待てない」は本論の重要な命題である。Withholdは個人の能力ではなく、関係性の中で成立する機能である。心の中に「大丈夫だ」と言ってくれる誰かの記憶が内在化されているとき、F軸の圧に対してWithholdを維持する力が生まれる。

内在化のメカニズムは発達心理学的に記述できる。外的關係（養育者との相互作用）が反復的経験を通じて内的作業モデル（Bowlby）として形成され、対象の取り込み（Klein）を経て、内在化されたcontainer（Bion）となる。この過程がWithhold能力の発達の基盤をなす。

重要な留意点として、内在化の質がWithhold能力に影響する。不安定な関係も内在化されるが（不安定型愛着）、それは不安定なWithholdの基盤となる。一方、新たな関係経験により内的作業モデルは更新されうる（獲得安全型）。

3.5 一度ここで離れてよい

ここまでの定義で、欠損駆動思考が何を記述しようとしているかはおおよそ見えるはずである。もし必要なのが定義の確認だけなら、この先の比較分析を読まなくてもよい。

この先で行うのは、欠損駆動思考が既存理論を上書きするという主張ではなく、異なるラベルがどこまで同じ構造を指しているかを見に行く作業である。比較はすべて足場であり、どれも最終確定ではない。

4. 先行研究との構造比較

4.1 Karl Friston——自由エネルギー原理と予測誤差

Karl Fristonは、脳が予測誤差を最小化するシステムであるという自由エネルギー原理を定式化した。

類似: 欠損駆動思考のD1（欠損）は、予測符号化における予測誤差に対応する。脳が環境のモデルを持ち、そのモデルと実際の入力との差分を検出するという基本構造は、欠損の計算論的参照枠そのものである。

独自: 自由エネルギー原理は予測誤差の「最小化」を原理とする。脳は誤差を減らす方向に動く。欠損駆動思考が注目するのは、この最小化に抗う局面——誤差を保持し、問いとして維持する機能（Withhold）——である。Fristonの枠組みの中に「誤差の保持」を記述する語彙は、私の探索の範囲では見当たらない。能動推論（Active Inference）のpolicy precisionの操作としてWithholdを参照することは可能だが、これは本論の暫定的な試みである。

学び: 予測誤差の精度重み付け（precision weighting）という概念は、欠損がどの程度意識化されるかを記述する枠組みとして有用である。全ての予測誤差が欠損になるわけではなく、精度閾値を超えたものだけが「欠け」として体験される——この選択性を記述する言語をFristonの枠組みは提供している。

文脈: 自由エネルギー原理は計算論的神経科学の枠組みであり、数理的に定式化されている。本論の1人称的・現象学的な記述とは記述水準が異なる。「予測誤差の保持」を自由エネルギー原理の内部で記述する場合、本論とは異なる概念的制約が課される。

4.2 Wilfred Bion——Container-Contained と negative capability

精神分析家Wilfred Bionは、複数の概念を通じて「わからないまま待つ」構造を記述した。

類似: Bionがnegative capability（Keatsからの借用）として記述したもの——記憶・欲望・理解なしに患者と向き合う態度——は、Withhold（D2）と似た構造を指しているように見える。また、BionのContainer-Contained概念は、本論のD4（Container）の直接的な先行記述である。養育者（Container）が乳児の未消化の体験（ β 要素）を受け止め、意味のある体験（ α 要素）に変換して返す——この構造は、Withholdが関係性の中で成立するという本論の主張と同じ方向を向いている。

独自: 本論は「内在化されたContainer」を明示的に強調する。Bionの初期の記述ではContainerは主に外的関係（分析者-患者、母-子）として記述されるが、本論は心の中に内在化された関係——亡くなった人の記憶、過去の養育者の記憶——がContainerとして機能することを構造の中心に置いている。Bionの後期の記述（O: 究極的現実への信頼）は、この方向への拡張を示唆しているが、内在化された関係を明示的にContainer概念の中核に置いた記述は、本論に固有のものであるように見える。

学び: Bionの α 機能（未消化の体験を思考可能なものに変換する機能）は、Withholdの循環構造——欠損の意味が更新される過程——を記述するための有用な参照枠である。Withholdの出力が下位層に再入力され欠損の意味が更新されるという本論の記述は、 α 変換の構造と対応しているように見える。

文脈: Bionの概念は精神分析の臨床的文脈で発展した。Container-Containedは当初、分析者-患者関係、母-子関係という二者関係の文脈で記述されている。本論はこの概念を個人の内的構造に拡張して使用しており、Bionの臨床的文脈とは射程が異なる。

4.3 John Bowlby——愛着理論と内的作業モデル

John Bowlbyは、乳幼児と養育者の関係パターンが内的作業モデル（Internal Working Model: IWM）として内面化されることを記述した。

類似: 内的作業モデルは、外的関係が内面化されてWithholdの基盤となるメカニズムを記述する発達の枠組みである。本論のD4（Container）における「内在化された関係」は、Bowlbyの内的作業モデルの概念と直接的に対応する。安全型愛着において形成される「養育者は応答してくれる」という期待が、成人期においてもWithholdを支える内的基盤として機能する——この構造は両者に共通する。

独自: 本論は内的作業モデルをWithholdの成立条件として位置づけている。Bowlbyの枠組みでは内的作業モデルは愛着行動の制御システムとして記述されるが、「誤差を保持する能力」との明示的な接続は、私の探索範囲では見当たらない。

学び: Bowlbyの枠組みは「獲得安全型（earned secure）」の存在を示唆している。不安定な愛着パターンで育った個人が、新たな関係経験を通じて安全型に移行するという知見は、Containerが固定的ではなく更新可能であることを支持する。

文脈: 愛着理論は発達心理学の枠組みであり、生涯発達の文脈で実証的に検証されている。本論が愛着理論を参照するのは「足場」としてであり、愛着理論の枠組みの中に欠損駆動思考を位置づけることを意図していない。

4.4 Karl Weick——センスメイキングとMann Gulch

組織論のKarl Weickは、Mann Gulchの山火事（1949年）で消防士たちが道具を手放せなかった事例を分析し、組織における意味形成（sensemaking）の崩壊を記述した。

類似: Mann Gulchの事例は、F軸の圧が極限に達したときにWithholdが崩壊する構造を記述している。消防士たちが慣れ親しんだ道具を手放せなかったこと——これは既存のモデル（予測）に固執し、現実との誤差を受け入れられなかった状態であり、本論のF軸支配下でのWithhold崩壊と同じ構造を指しているように見える。Weickが「心理的安全性」の重要性を指摘したことは、本論のContainer（D4）の組織的現れと対応する。

独自: Weickのセンスメイキングは「事後的な意味づけ」（retrospective sensemaking）に焦点を当てる。本論のWithholdは「保持しながらの意味更新」であり、事後ではなく進行中の過程を記述している。この時間的な差異は構造的に重要かもしれない。

学び: Weickの「ルース・カップリング」概念——組織の要素が緩やかに結合していることで柔軟性が生まれる——は、F軸支配に対する組織的な緩衝として読める。Withholdを組織レベルで記述する際の有用な参照枠である。

文脈: Weickの分析は組織行動論の枠組みにある。個人の認知プロセスではなく、集団レベルでの意味形成と崩壊を記述している。本論が個人の内的プロセスとして記述するWithholdを、組織レベルに拡張する際には、この水準の違いに注意が必要である。

4.5 Graham Wallas——創造プロセスの4段階

Graham Wallasは『The Art of Thought』（1926）で、創造プロセスを準備（Preparation）、孵化（Incubation）、照明（Illumination）、検証（Verification）の4段階として記述した。

類似: Wallasの「孵化」段階は、問題から意識的な注意を離れた後に無意識的な処理が進むという記述であり、Withholdの「問いとして保持する」構造と部分的に対応する。どちらも「すぐに答えを出さない」期間の重要性を記述している。

独自: Wallasの孵化は「意識的注意の撤退」を含意する。Withholdは注意の撤退ではなく、誤差への意識的な保持と循環的な意味更新を記述している。また、Wallasのモデルは線形的な段階モデルであるが、Withholdは循環的なプロセスである。さらに、Wallasのモデルには「保持を支える関係性」（Container）に相当する記述がない。

学び: Wallasの4段階モデルは100年にわたって創造性研究の参照枠として機能してきた。このモデルが広く受容されている理由——人間の創造的体験の記述として「じっくりくる」こと——は、体験の構造記述という方法論的アプローチの有効性を示唆している。

文脈: Wallasのモデルは内省に基づく記述であり、実証的に検証されたプロセスモデルではない。本論の方法論（1人称的観察からの構造記述）と類似した認識論的立場にある。

4.6 代表的な構造対応の例示

ここでは、30領域の個別調査から、欠損駆動思考との対応が見えやすい例を4つだけ挙げる。対応表を網羅するためではなく、「こういう見方で横断比較するのか」を掴むための例示である。

物理学 (D02) : 相互作用の界面で生じるずれと、そのずれをすぐに潰さず保持する条件という見方は、欠損とWithholdの構造を考える足場になるように見える。ただし物理学は主観的経験を記述していないため、欠損そのものではなく、どこで「ずれが立ち上がるか」を見るための参照枠として扱うのが妥当である。

経営学 (D22) : 組織が弱信号を拾えず、既存KPIや締切の圧に引き戻される局面は、F軸支配下でWithholdが潰れる構造を示しているように見える。ここで重要なのは「経営理論が欠損駆動思考を支持する」ことではなく、別の語彙で同じ崩れ方が記述されている点である。

発達心理学 (D23) : 乳幼児と養育者の相互調整、破綻と修復、内的作業モデルの形成は、Containerがどのように発達的に成立するかを見る上で強い足場になる。Withholdを個人能力ではなく関係の中の機能として捉える本論の立場は、この領域と近い方向を指している。

伝統知 (D30) : 口承伝統や作法の継承では、すぐに意味を固定しないまま型を受け渡す実践が見られる。これは「誤差の保持」が個人の内面だけでなく、共同体や文化の中でどう支えられるかを見るための参照枠になる。

5. 横断的知見

5.1 「誤差の保持」の不在

先行研究を横断して見えてくるのは、「誤差の保持」を中心に置いた記述の不在、あるいは周辺性である。

自由エネルギー原理は誤差の「最小化」を原理とする。認知的再評価は誤差の「捉え直し」を記述する。反応抑制は行動の「停止」を記述する。Wallasの孵化は意識的注意の「撤退」を記述する。Bionのnegative capabilityは「わからないまま待つ」態度を記述するが、これは欠損駆動思考のWithholdに最も近いものの一つであるように見える。

「誤差を保持し、その意味を循環的に更新する」という機能を中心に置いた記述に、私の探索範囲では出会っていない。これは本論の独自性を示唆するかもしれないし、私の探索範囲の限界を示しているかもしれない。どちらであるかは未解決である。

5.2 Containerの横断的構造

「保持を支える関係性」は、複数の領域に異なる名前で現れる。

領域	名称	機能
精神分析 (Bion)	Container-Contained	未消化の体験を受け止め変換する
愛着理論 (Bowlby)	安全基地、内的作業モデル	探索行動の基盤
組織論 (Edmondson)	心理的安全性	リスクテイクの基盤
教育学 (Vygotsky)	最近接発達領域	援助のもとでの学習
禅	師弟関係、公案	修行を支える構造

これらは異なる文脈で異なる機能を記述しているが、共通する構造——「ひとりでは耐えられない不確実性を、関係性が支えることで保持可能にする」——が見えるように思える。

本論のContainer (D4) は、この横断的構造を「Withholdの成立条件」として定義的に位置づけた。ただし、各領域のContainerは固有の文脈を持っており、本論の用語に翻訳して同一視することには慎重でなければならない。

5.3 F-O軸の横断的構造

F軸（生存脅威としての評価）とO軸（関係性としての評価）の二重評価構造もまた、複数の領域に対応する記述を持つ。

領域	F軸に対応する記述	O軸に対応する記述
神経科学	扁桃体の脅威検出	vmPFCの社会的評価
精神分析 (Klein)	妄想-分裂ポジション (PS)	抑うつポジション (D)
愛着理論	闘争-逃走反応	愛着行動システム
構成主義的情動理論 (Barrett)	身体予算管理 (body budgeting)	社会的文脈による情動構成

F-O軸がこれらの記述と構造的に対応するかどうかは仮説の段階にある。各領域の概念は固有の理論的文脈を持っており、F-O軸への翻訳は解釈行為である。

6. 根拠の状態と未解決の問い

根拠の状態

温度	内容
確定	D1-D4の定義（暫定的だが現時点で採用している）
有力	先行研究 (Bion, Bowlby) との構造的対応。「誤差の保持」が先行研究で周縁的に扱われているという観察
仮説	F-O軸と神経科学的知見の対応。Withholdの計算論的参照枠 (policy precisionの操作としての記述)。Wallasの孵化とWithholdの構造比較
未解決	「誤差の保持」の不在が本論の独自性を意味するか、探索範囲の限界を意味するか。内在化されたContainerの発達のメカニズムの詳細。F-O軸の二重評価構造が実証的に検証可能かどうか

未解決の問い（保持論点）

1. **Withholdと能動推論の接続:** Withholdをpolicy precisionの低下として記述する試みは暫定的である。能動推論の枠組みの中に「誤差を保持する」機能を記述する適切な語彙が

あるかどうかは未解決である。本論が仮置きしている「error precision」という概念は、能動推論の標準語彙にはない。

2. **Container内在化の条件:** 外的関係が内在化されてContainerとして機能するための条件は、Bowlbyの愛着理論とKleinの対象関係論が基盤を提供しているが、Withholdの成立条件としてどの程度の内在化が必要かは未解決である。
3. **F-O軸の構成主義的位置づけ:** Barrett (2017) の構成主義的情動理論は、情動が感覚入力から構成されるものであるという立場をとる。F-O軸はこの構成過程の構造を記述しようとしているが、構成主義的情動理論の枠組みの中でF-O軸がどう位置づけられるかは検討が必要である。
4. **N=1の射程:** 本論の観察はpjhiro個人のN=1の現象学的自己観察に基づいている。この記述が他者の体験にどの程度対応するかは未検証である。対応しない場合、それはpjhiro個人の認知特性の記述として価値を持つのか、それとも記述の精度の問題なのかを区別する基準が必要である。
5. **「誤差の保持」と時間:** Withholdは「秒～循環的」な時間スケールで記述されているが、この時間スケールの妥当性は検証されていない。Wallasの孵化（数時間～数日）、Bionのnegative capability（分析セッションの時間スケール）、マインドフルネス瞑想における注意の保持（秒～分）——これらの時間スケールの違いが構造的な差異を意味するかどうかは未解決である。

7. 参考文献

凡例: 以下の文献は欠損駆動思考の「証拠」ではなく、構造比較のための「足場」として引用している。各文献は固有の理論的文脈を持っており、本論の枠組みへの翻訳には解釈が介在している。

- ・ Barrett, L. F. (2017). How emotions are made: The secret life of the brain. Houghton Mifflin Harcourt.
- ・ Bion, W. R. (1962). Learning from experience. Heinemann.
- ・ Bion, W. R. (1970). Attention and interpretation. Tavistock Publications.
- ・ Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol. 1. Attachment. Basic Books.

- Bowlby, J. (1988). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human development*. Basic Books.
- Friston, K. (2010). The free-energy principle: A unified brain theory? *Nature Reviews Neuroscience*, 11(2), 127–138.
- Klein, M. (1946). Notes on some schizoid mechanisms. *International Journal of Psycho-Analysis*, 27, 99–110.
- Schön, D. A. (1983). *The reflective practitioner: How professionals think in action*. Basic Books.
- Wallas, G. (1926). *The art of thought*. Jonathan Cape.
- Weick, K. E. (1993). The collapse of sensemaking in organizations: The Mann Gulch disaster. *Administrative Science Quarterly*, 38(4), 628–652.
- Weick, K. E. (1995). *Sensemaking in organizations*. Sage Publications.